



TITLE:

ナチスに於ける共同體の概念 - プ
ェニングの論文を中心として -

AUTHOR(S):

中川, 與之助

CITATION:

中川, 與之助. ナチスに於ける共同體の概念 - プェニングの論文を中心
として -. 經濟論叢 1937, 44(2): 320-328

ISSUE DATE:

1937-02-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130893>

RIGHT:

京都市大國學經濟學會 經濟論叢

第 二 號 第 四 十 四 卷

昭和二年二月一日發行

論 叢

新宮凉庭の經濟思想

經濟學博士

本庄榮治郎

相續税の高さ

法學博士

神戸正雄

固定資本の性質

文學博士

高田保馬

時 論

税制整理案を論ず

經濟學博士

汐見三郎

研 究

ルーテル經濟觀の基礎

經濟學士

澤崎堅造

投資を越ゆる貯蓄の過剩

經濟學士

飯田藤次

獨逸兼營主義銀行における交互計算業務

經濟學士

田杉 競

獨逸財政學と租税轉嫁論

經濟學士

島 恭彦

說 苑

英吉利の對蘇輸出信用保證について

經濟學博士

小島昌太郎

ナチスに於ける共同體の概念

經濟學士

中川與之助

晝間移動人口論

經濟學士

青盛和雄

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁 轉 載)

ナチスに於ける共同體

の概念

—プエニングの論文を中心として—

中川 與之助

共同體 (Gemeinschaft) といふ言葉は從來種々の場合に使はれてゐて、其の内容も必ずしも一定してゐなかつたが、今日ナチス獨逸で行はれる共同體の概念は又、此等從來のものと全く異つた内容をもつてゐる。新しき内容を表現するのに舊き形式を以てすることがあるが、爲めに新しき内容を舊きものと同視することは許されぬ。プエニングは斯様な前置を述べて、先づ從來の共同體概念を検討しつゝナチスに於ける共同體概念を論述してゐる。

プエニングに據れば共同體の通俗的概念には三つある。(イ)小市民的—感傷的 (die kleinbürgerlich-sentimentale) (ロ)文學者的—ロマンテック (die schöngesinnig-

romantische) (ハ)組合主義者的 (die zünftensche) 共同體概念これである。

(イ)小市民的—感傷的共同體概念 抽象的にみれば之は廣く人間の本質と希望とを言ひ表はすものであるが具體的には小市民階級に抱かるゝ自由主義的調和を意味する。彼等は平和 (Friedfertigkeit)・安全 (Sicherheit) 快適 (Gemütlichkeit) なる社會を共同體と考へる。然し是は居酒屋さんの思想である。その思想の歴史的社會的背景を探ると、上から來る資本家階級の經濟力と、下から盛り上がる下層階級の社會的勢力に押しつめらるゝ小市民が、兩方からの重壓を避け彼等の地位の平和と秩序とを維持せんとする希求であり、いはゞ前資本家的殘滓的イデオロギーである。革命的意味に於けるナチスの共同體概念とは全く別個のものである。

(ロ)文學者的—ロマンテック共同體概念 もこれは詩人や思想家の頭から出た思想であり社會的にはインテリゲンチヤを支配してゐる思想である。その特徴は内的無力性と感傷性とにある。それは人生の何たるか

* Andreas Pfennig, Gemeinschaft und Staatswissenschaft (Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft 96 Bd. 2 Heft).

を知らぬ人々の觀念であり、感情的に高調せらるゝ道義に過ぎぬ。この思想には幻想と錯覺がつき纏ひがちである。思想史的にはキリスト的理想主義或は理想的キリスト主義ともいふべきものであらう。この思想も前者と同じく闘争を好まぬ。いはゞ温室育ちであり暴風雨の中では立つてゆける思想ではない。かゝる意味の共同體は何等確とした現實ではなく遠くの野に聞ゆる牧歌に外ならぬ。(ハ)組合主義者の共同體概念 この概念には前二者の思想も多少混在してゐるが、その特色は社會的な集團や階級の希望や努力の表現なる點にある。それは彼等の社會的窮狀を訴ふるが、その立場は集團的或は階級的利己主義である。彼等の共同體概念が社會的身分的意識によりて生き、職業に於ける社會的結合の紐帶となるならば、共同體關係の本質的構成となるが、同業組合や同一階級に制限せらるゝ連帶では利害關係の意識しかない。社會的にみるとこの思想は、外は彼等の生存を脅かす大經濟の壓迫を防衛し、内にありては彼等相互の經濟生活を確保せんとす

るものであるが、それが他の集團や階級に對して限界をたてることはかの勞働組合にみる如くである。勞働組合は共同體意識を發展させはしたがそれは明に階級意識であつた。勞働者階級から起さるゝ社會革命を抑壓する必要から生まれたかのファシズムも亦一の共同體的努力には違ひないが、かれ等が國家の強權を楯に資本家制度の弊を矯むるによりて、傳來の資本家的地位を維持せんとしつゝある點に於て、これ亦一つの階級的利己主義であり、獨逸の國民社會主義的共同體とは本質上相容れぬものである。

二

かくの如く俗流的共同體概念の説明を了へたプエニングは更に進んで、學問的な共同體概念の檢討に移り、重要なる社會哲學的體系に於ける共同體概念を明にしてゐる。プエニングが總ての社會哲學理論には人間共同生活の本質に就ての一定の見解、從つて又最も一般の意味の共同體理念が基礎となつてゐるとなすは吾人も亦全く同感である。彼は諸々の社會哲學の基礎をな

すこれらの共同體概念は又種々であるが、キリスト教的共同體概念と、哲學的觀念的共同體概念とが最も重要であるとなし、かくて前者の例としてはカトリック教の社會哲學を、後者の例としてはヘーゲル流の絶對者やシュパンの全體主義並びに自由主義の共同體理論をあげる。

(A) **カトリック教的共同體概念** カトリック教の教理では固定したる社會秩序が前提とせられ、共同體とはその秩序の再建に外ならぬ。その固定したる社會秩序は神の救済の福音からでなく専ら理性真理からひき出される。即ち人間社會設計の基線は造物主から人間性の中に描き示されてゐるのである。總ての生活領域文化領域はその源をかくの如き創造の原理に發するが故に統一があり目的の秩序がある。而してその秩序の最後の階段が神である。この教理が後に説く全體主義と異なる所は、カトリック教理ではその出發點が全體主義の如く精神的全體 (geistige Ganzheit) があつて、そこから身分や個人が出てくるのではなく、出發點は個人であ

る。この個人が職業身分に於て連絡して共同體を作るが「全體が部分に先だつ」といふことは、カトリック教では單なる論理的意義しかなく、全體は實質的にも時間的にも部分の先にあるのではない。出發點が個人にありと雖も併し乍ら原子の如き個體ではなく、自然に與へられ且つ神を希求する秩序の中に生活する個體である。この意味に於て社會は神で秩序付けられた共同體の一體系である。カトリック教に據れば人間の本質は個人性と社會性の二重性格を有する點にある。この二重性格たるや歴史的範疇でなく變はることも更へることも出來ぬ永遠の範疇である。個人の社會に對する、而して又社會の個人に對する關係てふ二重關係は造物主の定めた所であり、それ故に又理性の要求に合致する。カトリック教の個人は社會的本性としての個人であり、機械的な原子化したる個人主義にいふが如き個人でも、又全體主義にいふが如き支體でもない。かゝるキリスト教的連帶主義はレオ十三世の教理にもみうる。「人間は國家より古し」(Der Mensch ist älter als

der Staat)「家族的共同體は概念的にも實際的にも國家的共同體に先立つ」(Die häusliche Gemeinschaft geht begrifflich und sachlich der staatlichen Gemeinschaft voraus)といふが如きこれである。この理論から自己活動や自己決定の權利が認められ、更に又かくの如き個人の本性に基づく自然的共同體構成の權利が生まれる。かゝる諸權利を否定するものは神の意圖せる自然秩序に違反するものであり、その報いが必ずや民族的・政策的に共同體生活の破綻となつてあらはるゝであらう。この見地によれば社會生活は個人から出發し最後には矢張り個人の爲めである。カトリック教の共同體は人間の自然性や本性に基づくものであり、その共同體はいはゞ自然的共同體 (natürliche Gemeinschaft) である。更にその共同體を形容的にいへばそれは下から上への生長的生成である。個人が基本となりそれが他の個人と助け合ひ補ひ合つて高次の結合をなす。これを「社會活動の補助性の原理」(Das Prinzip der Subsidiarität der Gesellschaftsfähigkeit) とす。共同體として

ナチスに於ける共同體の概念

の社會はよく組成せられたる多數の統一である。この社會哲學では各個人の創造にかゝることをその個人から奪ふことが正しからざる如く、小さな或は下級的な共同體がなしえ、且つよりよくなしうることを、より大なる又は上級團體が奪ふといふことは正義に反する。國家は國家としてなすべき最高の給付をなせば足り恣意的に自然的共同體に干涉する權利がない。國家の秩序は常に自然的法的法則の埒内に止まるべきであるとなす。要するにカトリック教の共同體概念は自然的・スコラ的であり、反國家的であり個人的である。

(B) 哲學的觀念的な社會哲學上の共同體概念 (「その

一」は「絶對者」の觀念をもつて來るものである。それに據れば個人はその絶對者の一部分である。各個精神は絶對者と同様である。人間精神はこの絶對者或は世界全體 (Weltganzen) 世界精神 (Weltseele) と不可分に結ばれてゐる。人々の中に世界が反映し世界の中に人々の精神が映る。この絶對者と個人との關係は共同體と個人との關係である。この絶對者はフィヒテにあり

ては絶対理性 (absolute Vernunft) であり、吾人の内なる神的 (Das Göttliche) なるものに當る。個人と神的なるものとは根本的に相通ぜざるものでなく、二者は其有關係である二者は完全な一體になりうるし又なるべきものである。各人が眞理と道義とにより即ち吾人の内なる神的なるものに於て生活するときは、かゝる神人一體の祝福された境地に達しうる。この神的な理性による生活、即ち憐人に對する道義、或は憐人を助け憐人の爲に犠牲になるといふことから共同體の生活が生まれる。共同體は即ち超個人的精神力、神的理性の發露であり、その本質は道義的事柄に屬する。共同體は道義の命令であり、又理性の命令であるといふ。

【シュパン】 (O. Spann) の全體主義 (Der Universalismus) シュパンに據れば原事實 (Ursache) — 社會科學の出發點であるべき所の — は個人ではなくして、人間と人間との精神的結合即ち精神的共同體 (geistige Gemeinschaft) である。人類の精神生活は一の總共同體であり各個人はその精神的支分體 (geistige Glieder)

である。かゝる總共同體の精神的内容は同種的な種々の階段の精神的內容から構成される。かくてそこに精神的地位或は身分 (geistige Stände) なるものが生じ、それが組織によりて行動にあらはるゝ場合には行動的な地位或は身分 (handelnde Stände) となる。かゝる行動的地位身分には宗教的經濟的國家的等の立場から Kirche, Wirtschaftsstand, Stand Staat, が存するわけである。人間の精神と精神との觸れる所に相互の覺醒があり生成があり共通的なある感情と知識が與へられる。かゝる感情と知識こそ精神の結合を意味するものである。更に又シュパンに據れば總ての階級・身分にはその特有の精神内容を有するのであるから、自ら又總ての階級・身分にはそれに特有の支配權 (Herrschaftswalt) と至上權 (Souveränität) がある。かくて各階級や身分が精神的・道德的總生活內容に於て特有なる實質的任務を負擔し之を遂行する。國家も上に擧げたる如く勿論精神的には身分國家であり、かれは常に世界に於ける特有の地位と任務を有する。身分國家こそ眞の

國家 (walrer Staat) の姿なのである。

〔その三〕自由主義に於ける社會哲學 プェニングは言ふ。自由主義の共同體理論は機械的・自動的であり決して直接的な生の統一ではない。その哲學的出發點は有神論に於ける自由主義である。この世界觀に據れば神は直接的な作用をなす現實の力ではない。神はその創造物——勿論人間を含む——をその手から放してしまつた。併し神は創造物の中に無限なる自己運動の力を賦與した。世界 (Welt) といふ機構は最早神の創造を必要とせぬ。この機構は創造者の意圖し給ふ調和である。かゝる調和への條件は世界構成員の自由である。即ち自由のある所に世界全體の調和が行はれる。„laisse faire, laissez passer“ は力の自由なる行使の原則でありそれが自動的に調和的均衡に導く。されば自由主義に於ける共同體は調和と同一に解せられる。この學說に於ける共同體理論では個人が中心であり、その個人を自然に自由に放任すると機械的・自動的に調和即ち共同體が實現するといふのであるが、それは決して眞の

ナチスに於ける共同體の概念

共同體を解せぬものである。假定的・機械的・似而非共同體 (Pseudogemeinschaft) である。かのマルキシズムも亦自由的機械的共同體理論から出發してゐる。併しマルキシズムでは社會の調和は力の自由行使からは成立せぬ。二つの敵對せる階級の分裂が除かれる場合に始めて、即ち私有財産に基く階級が消滅したときにそれが實現する。所有者と非所有者、支配者と被支配者との對立なき社會では經濟的に「飽和」(saturatio)せる個人が共存するのみであつて、人類は支配も服従もなき共同生活を営みうるとなす。併しこれはユトピアである。彼等の理論では指導の秩序 (Führungsdung) や順位の秩序 (Rangordnung) は不可能であるが、これなくして人間社會の眞の共同體はありえない。要するにマルキシズムの共同體理論は佛國革命の標語たる個人の平等以外の何ものでもない。

三

從來の共同體概念を右の如く検討し去つたプェニングはいよ／＼ナチス革命の意味に於ける共同體概念の

解明に移る。國家科學は實在の科學である以上ナチスの共同體概念も亦國民社會主義運動の齎した現實の具體的事實から導き出されねばならぬ。獨逸國民の窮乏は獨逸國民に新なる課題と目的とを與へそれが遂にナチス革命にまで進展した。ナチス革命の最高目的は「不滅の獨逸」(Das ewige Deutschland)の建設であり國民統一の確立である。かくの如き目的は拱手してゐて實現されるものではなく政策的努力に俟たねばならぬ。今や獨逸のあらゆる具體的な共同體にはこの共通なる政治的民族的使命が脈うつてゐる。革命運動と密接の關係を有するナチス共同體は勿論自然共同體ではなく一定の目的と意志の方向を確立してゐるいはゞ意志的共同體である。併し乍ら新しき意味の共同體は完成してしまつた秩序や狀態を指すのではない。國民統一の實現は繼續さるべき努力であり不斷の生成と形成とが行はれねばならぬ。國民社會主義は獨逸民族の使命のために獨逸民族が生きんが爲めに世界を變革せんとするものである。従つてそれは積極的であり活動的であ

り形成的であり且つ又鬭争的である。これナチスの共同體を鬭争共同體 (Kampfsgemeinschaft) とよばんとする所以である。鬭争共同體の本領はカトリックの如く自然的共同體ではないが、又シュパンの説く如き精神的な事實でもない。勿論精神の相互の生成變化・相互覺醒といふことはあるがそれは第一次のことではなく、第一次なことはそれが民族的統一運動であり共同體の目的や使命が意志的 (willens mässig) に決定せられてゆくといふことである。而して新しき共同體結成の基礎は單なる精神に非ずして血縁 (Blut) であることも、從來の共同體の原理と異つてゐる。ナチスの世界觀に據れば共同體の構成員の同一性としては唯民族といふことのみが統一的な意志方向を決定せしめる。文化や精神や道德の内容が同一であるといふことは他民族間に於ても可能なことであつて、鬭争共同體の構成員たる基本的資格とはなりえない。獨逸民族にして始めて獨逸民族に課せられたる歴史的使命の爲めに鬭ふ人たりうるとなすのである。抑もかゝる共同體を生ましめた

原因は之を世界戦争に求めねばならぬ、世界戦争中及戦後に嘗めた苦き體驗は獨逸民族のみがこれを知りうる。この體驗は宗教的性質のものでなく、觀念的のものでなく、現實的な生そのものゝ體驗である。獨逸國民はこれによりて世界の改造は權利とか平和とか自由とかその他色々の觀念では到底解決されるものではないことを體驗した。そして唯將來獨逸民族の爲めに闘はうといふ民族的精神を振ひ起した。かゝる體驗は勿論物質的・利己的なものではなく、個々人の主觀的立場や運命や判斷を超越した民族としての體驗なのである。かゝる體驗から生まれた新しき共同體に於ける本質的な意識關係や意志干係を擧げならるば、(a)個人主義型の個別化とか私的存在の意識がすてられて宿命的民族的結合への意識へ轉換し、民族のためになすといふ個人の責任意識と責任意志が之に代るに至つた。(b)凡て個人の使命や價值はこの共同體に對する關係から決定される。所有とか教養とか地位は問題ではなく、この共同體に對する給付・性格・確證の程度が問題とな

ナチスに於ける共同體の概念

つて來た。(c)この共同體では總てが平等であるといふが如き擬制が排せられ、社會に順位等級を從つて又當然に指導と服従の必要が認識せられる。勿論その順位等級といふのは奴隸と主人、善と惡といふが如き意味ではない、同價值なる共同體の構成員間に於ける活動や責任の程度・分野の差を指すのである。闘争共同體では指導者は彼によりて認められたる共同體の目的と方法とに構成員が追隨することを要請する。(d)闘争共同體では闘争の止むをえざることが認識せらる。即ち闘争共同體は自己即ち國民の自己主張の爲めには周圍と或は世界と戦ふことが必要にして避くべからざることとなす。現實は調和ではなくして一の對立であるといふ認識に立つのである。

凡そ右の如き民族的・政策的・社會的・軍隊的・闘争的四要素はナチス共同體構成の原理である。國民社會主義はかくの如き固有の理念と原理とによりて「腐敗」せる世界を變革し民族的崩壊を防ぎ新しき民族を創り出さんとするものである。國民社會主義は決して出來上

つてしまつた世界觀ではない。現に生成發展しつゝある動的概念である。この運動の世界觀は民族運動そのものから、又その指導者の頭から更新せられ展開されてゆくであらう。共同體に於ては今やかの個人的・私的な考へ方に對して民族的・政策的原理が、ブルジョアの原理に對して社會主義的原理が、民主的・自由主義原理に對して連帶的身分的原理が、平和的・靜的要求に對して鬭爭的・能動的要求が代つたのである。

四

以上之を要するにナチスの共同體概念は從來のそれと本質を全く異にする。それは平和と安全とを希ひ鬭爭を避けんとする小市民的のものでなく、又幻想と錯覺にとらはれて何等の實行力をもたぬロマンチックなものでもなく、又利己的な集團や階級のイデオロギーでもない。その精神は鬭爭的であり、活動的實行的であり、非利己的であり犠牲的である。又、ナチスの共同體はカトリック教の教理の如き自然的共同體でもなく、フィヒテやシュパン等の説く如き精神的・觀念的な

ものでなく、又自由主義の説く所の機械的調和論でもない。それは意志的政策的であり、現實的でありその態度は鬭爭的である。而してかゝる鬭爭的共同體の紐帶は決して單なる精神や文化に非ずして民族を流れる血縁である。鬭爭共同體はこの血縁を土臺として民族政策のために民族を統一する。その鬭爭共同體では個人主義や民主主義、自由主義が排せられて、身分や順位體系の思想が之に代り、平和や安逸に代りて能動的鬭爭的であることが要請せられる。併し國民社會主義は動的な概念である。その達成のためには不斷の生成を續けるであらう。さればプエニングの述べたる上の如きナチスの共同體概念も亦ナチス運動の現階段を説明したものであり、この概念が將來をもそのまゝに規定するものではないと考へる。且又、かゝる共同體理論の下に進展してゆくナチス運動が果して、獨逸國の對內的・對外的政策の行詰りを打開して所期の如く「永遠の獨逸」がもたらされるか否かは、勿論この概念とは別箇の問題である。(二二・一九)